慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Le Lai de l'Oiseletについて
Sub Title	Remarques sur le Lai de l'Oiselet
Author	松原, 秀一(Matsubara, Hideichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.142(205)- 151(196)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Le Lai de l'Oiselet について

松　原　秀　一

I. Disciplina Clericalis と le Lai de l'Oiselet

Le Lai de l'Oiselet は八音節平韻で書かれた作者不明の中世フランス語の作品である。行数約四百行計りで，創作年代は十三世紀と推定され現在フランス国立図書館所蔵の五写本に保存されている。Gaston Paris はこの作品の校訂版の前書きで「lai の名は厳密には適当でない」とし Joseph Bédier はこの作品を教訓談（apologues）と分類している。Gaston Paris も Paul Zumthor の中世フランス文学史でも fabliau としている。最近 Jean Frappier 氏は lai について作品構成からの注目すべき定義を発表した[(1)]が，氏は le Lai de l'Oiselet を fabliaux と lais の境界にある作品といい乍らも構成上 lai としている。この見解は極めて妥当と思われるがその検討は後に譲り，作品の梗概を述べれば次の如くである[(2)]。

「昔，金持の農夫が美しい庭園を持っていた。そこには立派な館も塔もあり泉も湧いていた。この庭は嘗っては雅びの騎士の所有だったが歳月と共に人手から人手に渡り今は此の農夫の手に落ちている。花や珍貴な薬草に満ちた庭には不思議な力があり，瀕死の病人でも一夜を比処に過ごせば快癒する程で，恐らくこの庭を造った人は秘法に通じていたに違いない。この庭に朝と夕に一羽の小鳥が来て歌を囀ずるが，これ程美しい鳴声は嘗って聴かれた事が無い。不思議なこの歌を聴けば悲みに満ちた心も弾み，恋を識らぬ心もときめき平民も王侯の心持を得，老人も乙女に慕われる青年の心を取戻す。小鳥こそ庭の不思議の源泉で，小鳥が庭を訪づれなくなれば泉も涸

れ，木木の葉も散り庭は魔力を失うのである。持主の田舎者も朝夕この庭に歌を聴きに来た。或る朝田舎者は庭に来ると泉で顔を洗い鳥の歌う lai を聴いた。小鳥は恋を称え騎士道の衰微を嘆き昔の美しい雅びの風を歌うが木の下の田舎者に気付くと，泉も涸れよ，木も枯れよと，嘗っての優雅な騎士女官に代って田舎者しか訪なわなくなった庭を嘆いて飛び去った。一方農夫は此の鳥を捉えれば高く売れると考え罠を仕掛ける。鳥は夕方戻って来て捕えられてしまう。鳥は籠の中では歌わぬ，小さな私を喰べても腹の足しにもなるまいと問答の末，三つの知恵 (trois sens) を授けるという条件で自由になると農夫に三つの教訓を授ける。それは「聴いた事を頭から信じるな」「手に入らなかった物を嘆くな」「手中の物を捨てるな」の三である。田舎者はこんな教訓は子供だましだと怒ると小鳥は，実は私の身体には三オンスの宝玉が入っていたのにという。これを聴いた農夫は口惜しさの余りに胸を叩き服を裂き顔を掻き拷る。小鳥はその様子を面白そうに見ていたが農夫に「お前の手中の私は半オンスの雀程もなかったではないか。お前には教訓が解っていない。手に入らなかった物を嘆く馬鹿なぞいないとお前はいったが，どうも今は涙を流して嘆いたようだね。それに手中にあった私を放したではないか，教訓をよく心に留める事だ」というと飛去り二度とこの庭に戻らなかった。泉は涸れ庭は荒れ果て農夫も楽しみを失った。諺にいう「欲張って元も失う」

この小鳥と三つの教訓の説話は広く類型が知られていて，中世仏語でも韻文では，"Le Roman de Barlaam et Josaphat" "Chastoiement d'un père à son fils" "Donnei des Amants" 散文には "Récits d'un Minstrel de Reims 等に見られ．ドイツでは，Hans Sachs, Nicolai 又 Luther の Tischreden に，イタリーでは，Arlotto もこの話を伝え英語でも Lydgate の "The Churl and the Bird" 等がありこの説話の分布を研究した Franz Tyroller[3] は 73 の文学的伝承を挙げている。Aarne-Thompson の Motif-index of Folk literature[4] では K-604 に，三つの教訓はそれぞれ J-21-12, J 21-13, J 21-14 に分類されている。現在の伝承中最古のものはダマスカスの聖ヨハネ作とされていたギリシャ語による「バラームとジョザファ伝」である。このジョザファ伝は，十一世紀にラテン訳で広く西欧に伝わったキリスト教聖者伝であるが，内容は仏陀の生涯であり Vincent de Beauvais の Speculum Historiae に収録され，後に Jacques de Voragine の LegendaAurea にも入り十六世紀にはカトリック教の公式の聖者とされ祝日も十一月

二十七日に定まった。この仏佗伝の西漸には数多の研究があり説も分れるが，中世アラビヤに広く伝わり印度起源である点は諸説の一致する所と思われる。小鳥と三つの教訓の話がこの十世紀（一説には八世紀）のギリシャ語の伝説に見られる事は，この説話の印度起源を暗示するが，ここでは，Le Lai de l'Oiselet の直接の母型となったと目される Petrus Alfonsi の Disciplina Clericalis にのみ触れたい。

Petrus Alfonsi は Moïse Sephardi という名のユダヤ人でアラゴンでラビだったが，1106年の聖ペテロの祝日にキリスト教徒となり代父となったアラゴン王 Alfonso 一世と聖ペテロに肖かって Petrus (filius spiritualis) Alfonsi と名乗った。改宗後 Dialogus contra Judaeos と Disciplina Clericalis をラテン語で著わした。後者は父が子に物語で信仰を教え教訓を与える形式で三十余りの物語を集めた，欧州では最も古い説話集で広く行なわれた。十二世紀末と十三世紀末に韻文による仏語訳が作られ共に六写本づつが現存している。ラテン語の写本は十二世紀より十六世紀のものがヨーロッパ各国に六十以上現在している。小鳥と三つの教訓の話は，Hilka と Soderhjelm の校訂した版では三十四の Exempla 中二十二番目にあたる。原文はこの版では次の如くである。(5)

Exemplum XXII: De rustico et avicula. Quidam habuit virgultuum, in quo rivulis fluentibus herba viridis erat et pro habilitate loci conveniebant ibi volucres modulamine vocum cantus diversos exercentes. Quadam die dum in suo ille fatigatus quiesceret pomario, quedam avicula super arborem cantando delectabiliter sedit. Quam ut vidit et eius cantum audivit, deceptam laqueo sumpsit. Ad quem avis: Cur tantum laborasti me capere, ve quod proficuum in mei capcione sperasti habere? Ad hoc homo: solos cantus tuos audire cupio. Cui avis: Pro nichilo, quia retenta nec prece nec precio cantabo. At ille: Nisi cantaveris, te comedam. Et avis: Quomodo comedes? Si comederis coctam aqua, quid valebit avis tam parva? Et eciam caro erit hispada. Et si assata fuero, multo minor ero. Sed si me abire dimiseris, magnam utilitatem ex me consequeris. At ille contra: Quale proficuum? Avis: Ostendam tibi tres sapiencie manerias quas majoris facies quam trium vitulorum carnes. At ille securus promissi avem permisit abire. Cui avis ait: Est unum de promissis: ne credas omnibus dictis! Secundum: quod tuum erit, semper habebis. Tercium: ne doleas de amissis! Hoc dicto avicula arborem conscendit et dulci canore dicere cepit: Benedictus deus qui tuorum aciem oculorum clausit et sapienciam tibi abstulit, quoniam si intestinorum plicas meorum perquisisses,

unius ponderis uncie jacinctum invenisses. Hoc audiens ille cepit flere et dolere atque palmis pectus percutere, quoniam fidem prebuerat dictis avicule. At avis ait illi: Cito oblitus es sensus quem tibi dixi! Nonne dixi tibi: non crede quicquid tibi dicetur? Et quomodo credis quod in me sit jacinctus qui sit unius uncie ponderis, cum ego tota non sim tanti ponderis? Et nonne dixi tibi: quod tuum est, semper habebis? Et quomodo potes lapidem habere de me volante? Et nonne dixi tibi: ne doleas de rebus amissis? Et quare pro jacincto qui in me est doles? Talibus dictis deriso rustico avis in nemoris avia devolavit.

Philosophus castigavit filium suum dicens: Quicquid invenies legas, sed non credas quicquid legeris. Ad hec discipulus: Credo hoc esse: non est verum quicquid est in libris. Nam simile huic jam legi in proverbiis philosophorum: multe sunt arbores, sed non omnes faciunt fructum; multi fructus, sed non omnes comestibiles. Castigavit Arabs filium suum dicens: Fili, ne dimittas pro futuris presencia, ne forsan perdas utrumque, sicut evenit lupo de bobus promissis a rustico (…)

Chastoiement d'un père à son fils は Disciplina Clericalis の韻文訳であるが此の話に当る所はアングロ・ノルマン方言の伝本では92行，フランスで書かれたノルマン方言の伝本では156行（共に八音節平韻）で語られ前者には十五世紀の写本4，十四世紀の写本2，後者には十三世紀の写本6が現在し Disciplina Clericalis の校訂者 Alfons Hilka と Werner Soderhjelm に依る校訂版がある。[6] 共に Petrus Alfonsi の内容を伝え知恵も「三頭の犢牛より価値ある」1) plus ke le char de treis veaus 2) Mieuz te vaudront a oïr (…) Que treis gras veel ne fereient 宝石も一オンスの Jagunce, jacinthe という程度にラテン文に忠実である。この jacinthe (hyacintus) は十二世紀初頭の博物誌である Philippe de Thaon の Comput に依れば，凡ゆる悲しみを消散させる力がある宝石とされ Lydgate では Jagaunce として，Donnei des Amants では Jagunce として現われるが，Legenda aurea, Gesta romanorum, Vincent de Beauvais の Spectulum historiae, ではギリシャ語の「バラームとジョザファ伝」と同じく Margarita（真珠）となっている。一方 le lai de l'Oiselet では宝石とのみいわれ重さは三オンスとなり，三頭の犢の比較は姿を消し，場面と登場人物も独自の物となっている。Barlaam et Josaphat の伝承では鳥は鶯であり狩師が捕え，庭は出て来ないのに対し，Disciplina Clericalis では鳥は小鳥とのみいわれ歌に魔力はなく農夫の庭で捕えられる。le lai de I'Oiselet

になると庭は不思議な世界になり小鳥は優雅な Courtoisie の世界の代弁者，農夫はあくまで現実的な利益しか解せぬ俗人で，優雅の世界を象徴する清らかな泉で顔を洗ったりする場違いな田舎者として描かれ，この二者の対照がはっきり目指されている。農夫の滑稽さの誇帳がこの作品を Gaston Paris, P. Zumthor に Fabliaux と分類させたと思われる。Bédier がこれを apologue とするのは，説話的伝承を考慮した分類と思われるが，この作者は始めから lai を書く意図があったのではなかろうか？ 中世に lai と呼ばれていた事実は尊重すべきであり，特に Disciplina Clericalis から le Lai de l' Oiselet その構成の変化は Jean Frappier が指適した lai の二重構造，即ち「レェでは殆んど常に主人公が，日常生活の世界を去り，選ばれた人のみ出入りを許されている仙界，若しくは感情的別世界に入る事となる」[(7)] Il arrive presque toujours dans nos lais un moment où le héros quitte le monde quotidien pour entrer dans un monde féerique ou sentimental dont l'accès est pemis seulement des êtres d'élites を目指したものではないかと思われる。

II. Le Lai de l'Oiselet の伝本

Le lai de l'Oiselet には既述の如く五写本が現存する。五つ共にフランス国立図書館 la Bibliothèque Nationale de Paris (B. N.) の所蔵である。[(8)] それは，

A. B. N. Fonds Français 837 (十三世紀)

B. B. N. Nouvelles Acquisitions 1104 (十三世紀)

C. B. N. f. f. 25545 (十四世紀)

D. B. N. f. f. 24432 (十四世紀)

E. B. N. f. f. 1593 (十三世紀)

の五写本である。A は，質の良い写本として有名で 362 フォリオの大冊で，フランソワー世の時代には既に王宮図書室の所有であった。le lai de l' Oiselet は 390 行である。B は同じく質の良い有名な写本であり，lais と呼ばれる作品のみる含む点で特異な写本である。最初に Ci commencent les lays de Bretaigne とあり fol, 49^{v} の le lai de l' Oiselet の後に Explicit les lays de Breteigne と記してある。Maris de France の lais 9 を含み Marie de France の写本としての略号は S である。lai のみを含む写本は他になく筆跡も一貫しておりこの写本に le lai de l' Oiselet が入っている事は興味深い。この写本では 410 行である。C は 37 の作品を含むがいくつかの写本をつづった物と思わ

れ，数人の写字生の手になるものである。le lai de l' Oiselet は，409行である。写本の型は全二者より小さい。D は，字の書かれている部分では五写本中最大のもので Marie de France の Isopet (Fables) を含んでいる。le lai de l' Oiselet は書き足されて500行になっている。E は Rutebuef の作品を多く含んでいて有名な写本で十六世紀の学者 Claude Fauchet の所蔵であった。75の作品を含むが，種々の写本から一部を取って来て一冊とした物である。le lai de l' Oiselet は五写本中最も短かく341行になっている。

Gaston Paris は甥の結婚記念に le lai de l' Oiselet の校訂版を1884年に出版した時，五写本が二系統に分かれる事を発見した。それは小鳥の授ける知恵の順序が，写本 A. B. D. では第一が，「手に入らなかった物を嘆くな」ne pleure pas ce qu'ainc n'eüs 第二が「聴く事全てを信じるな」Ne croi pas quanques tu ois dire 第三が「手中の物を足元に捨てるな」ce que tu tiens en tes mains Ne jete pas jus à tes piez であるのに写本 C E では第一が ne croi pas quanques tu ois dire 第二が ne pleure pas ce qu'ainc n'eüs となっている。即ち A. B. D. では Disciplina Clericalis の第一 ne credas omnibus dictis と第三 ne doleas de amissis が逆になり第二 Quod tuum erit semper habebis が最後に，3−1−2の順になっている。Gaston Paris は C, E. (1—3—2) が Disciplina Clericalis の順序に従いつつ第二と第三の教訓が逆になったと考え，C, E. の順を le lai de l' Oiselet の失れた原本に近いとし，Cに従いつつ校訂版を作った。但し十三世紀の漂準 francien の綴りを復元した為 graphie は A. B に近くなっている。Gaston Paris のテクストは申分なく，優雅なこの作品にふさわしいが上記の方法から五写本の何れからも異なり正に Bédier の Lachmann 校訂法批判の対照となり得るものである。(9) そのテクストは或る意味で第六の写本とも云える物になる訳で，勿論これが他の五写本より原作に近いことも可能であるが80年後の今日このテクストを新しい見地から見直す事が出来ると思われる。

失ず問題になるのは三つの教訓の順序である。Gaston Paris は C, E を Disciplina Clericalis の順に依ったというが Petrus Alfonsi では 1. ne credas omnibus dictis 2. quod tuum erit semper habebis 3. ne doleas de amissis であり chastoiement I. II もこの通りである。この第二の教訓は多くの伝承では直訳ではなく Lydgate でも第二は Desir thou not bi no conditioun Thyng that is impossible to recur となっている。Lydgate はこの作品を And heere I cast unto my purpoos Out of Frenssh a tale to

translate, Which in a paunflet I radde & sauh but late.[10] といっているが，このフランス語写本というものは伝っていない。然し Lydgate では教訓の順序は Disciplina Clericalis と等しい。所が le lai de l' Oiselet では，第二の教訓が五写本共 ce que tu tiens en tes mains Ne jete pas jus à tes piez となっている外に，五写本中のどれもが Disciplina cleicalis の順になっていない。即ち A, B, D では Disciplina clericalis の 3−1−2, C, E では 1−3−2 の順となっている。そして鳥と農夫の間答，特に宝石間答では明らかに le lai de l' Oiselet では場面の運びが変えてある。le lai de l' Oiselet では小鳥の第二の教訓に対して農夫は「手に入らなかった物を嘆く馬鹿（fols）が何処にいる？」といい返している。そこで宝石の件の種明して小鳥が先刻の言はどうした，お前は泣いていたようだったがねという言葉が態々出て来るので，この事は，第一の教訓が le lai de l' Oiselet では，Petrus Alfonsi の Nonne dixi tibi という形をとらずに，唯「お前の手中の私は雀より軽かったろうに」という形でのみ現わされている事，又一方 E を除いては le lai de l' Oiselet 最後の教訓，「手中の物を捨てるな」も種明しでは触られていない事と考え合せ意味深く思われる。つまり Disciplina Clericalis の「私はこうはいわなかったか」という形の解き明しは lai では避けられている，Apologue から lai の転回は意識的と思われるのである。この事は庭が不思議の世界にされ小鳥が amour courtois の讃歌を三十行に恒って歌う事と相挨って作者が，apologue でも fabliau でもなく lai を目指していた，少なくも lai の雰囲気を考慮していたと考える根拠となる得ると思われる。若し作者が新しい作品を目指して話のみを Disciplina Clericalis に借りたとすると三つの教訓の順序は伝承順位の決定では重要さを失う。同じ伝承の他の作品でも例えば Récits d'un Minstrel de Reims[11] の話の順序に Disciplina Clericalis の教訓の順を 1 2 3 として記せば 2—1—3 即ち 2. ce que tu tiens à tes mains tu ne getes pas à tes pies. 1. Que ne croies pas quant que tu orras 3 Que tu ne meines mie trop grand duel de la chose que tu ne pourras avoir ne recouvrer の順，Gesta Romanorum[12] では同じく 2—1—3 即ち 2 Numquam rem, que apprehendi non potest, apprehendere studeas 1. de re perdita et irrecuperabili numquam doleas 3. Verbo increbibili numquam credas. に，Gui de Cambrai 訳の Barlaam et Josaphat では 2—3—1 : 2. *ne t'esforchier tu ja du prendre Chose que prendre ne poroies* 3. Se tu de par chou te doloies U il n'aroit nul recouvrier, Li dels ne t'i aroit mestier 1. Et chose li ne fait à croire Ne tenir ja nul jor à voire. Arlotto[12] では 2—2—1 : 2. ne

cercare quella cosa, ch'è impossibile a trovare et havere 2 sappi tenere quella cosa, di che hai dibisogno. 1. non debbi creder pro niente quella cosa che non puo essere. 等 Disciplina clericalis の順でない物は多い。勿論, Barlaam et Josaphat と Disciplina Clericalis は直接に連絡のない別系統であるにしても, 教訓の順序は筆写しない限り容易に変り得ると思われる。le lai de l' Oiselet が B. N. N^lles Acq. 1104 の中世に lais と名付けられた物のみ含む写本に入っている事は注目すべきでこの特異な lais の選集が, 質の良いので有名な写本Aと共に, しかもDも含めて Disciplina Clericalis と教訓の順序の違うテクストを伝えている事は寧ろ le lai de l' Oiselet は A. B.D の側により忠実に保存されている事を考えさせられる。その場合, Petrus Alfonsi の Exempla を知っていた写字生が, 教訓の順が Exemplum と異るのに気付いて C. E の処く訂正する事は考えられるのではなかろうか? 若し原作が, Petrus Alfonsi の順を追って書かれたとすると A. B. D の伝承はそれを筆写生が訂正した事になるが, 一応, 写字生にそれだけの才能を認めたとしても, 筆写中に訂正を思い付かせる程の内容的必然性は無さそうに思われる。考えられる理由は le lai de l' Oiselet には Nonne dixi tibi: non crede quicqud tibi dicetur に当る表現が現われず, 表明された解き明しが Et de ce que tu me disoies Nus n' est si fols n'onques ne fu Qui plorast ce qu'ainc n'ot ëu, Maintenant, ce m'est vis, ploras Ce qu'ainc n'eüs, ne ja n'avras であるため前の教訓を授ける場面で第一にこれにあたる "sens" を持たせるという事があるが, これも充分には首肯しがたい。寧ろ A. B. D を原作を伝えると考える方が自然ではあるまいか?

Le lai de l' Oiselet を lai breton と考える事は伝承の上からは難かしい。然し merveilleux, féerie を lai breton の特徴と考えるならば同じ写本B中の lai de l'Ombre, le lai d'Epervier, le lai d' Aristote 等と比較して寧ろ lai breton らしい作品といえよう。これ等の lais の為に Frappier 氏は le monde féérique に ou sentimeutal と拡張的定義を行ったと思われる。写本B中の le lai de l' Oiselet は他の四写本にない「読み」leçons を幾つか含んでいるが, その leçons はどれも意味上, 正当化出来る物であり, Lachmann 法批判に深い関係のある le lai de l'Ombre (E) が同写本にある事と考え合せ興味深い。又 Marie de France の Hoepffener 版[14]の妥当性の問題にも結びつくと思われる。後日この問題を検討したく考えているものである。

註

(1) *le Lai de l'Oiselet.* éd. Gaston Paris 1884. recueilli dans "Légendes du Moyen Age" 1912. このテクストのみは, A. Pauphilet: Poètes et Romanciers du Moyen Age (Pléïade 1952) に収録されている。

Joseph Bédier : *Les Fabliaux* pp. 34 "La question est plus malaisée pour le lai de l'Oiselet, que M. G. Paris range parmi les fabliaux dans son *Tableau de la Littér. fr. au m. age* # 77 (2e édition), tandis qu'il ne le mentionnait pas à cette place lors du l^er^ tirage de ce même *Tableau de la Littér. fr.*, et que, dans son exquise édition de cet exquis poème, il n'écrit pas une seule fois le mot fabliau. Il faut plutôt, je crois, ranger le lai de l'Oiselet parmi les apologues, auprès du Dit de l'unicorne et d'autres poèmes similaires.

Bédier は G. P. が fabliau と édition でいっていないというがこれは誤りである。尚 Tableau de la litterature française は, La litterature frarçaise au M. A. の誤りと思われる。

Paul Zumthor: *Histoire Littéraire de la France Médiévale VIe-XIVe siècles.* 1954 Jean Frappier: *Remarques sur la Structure du Lai, essai de définition et de classement* (*in* La Littérature narrative d'imagination 1961. pp. 23-39)

(2) Gaston Paris の校訂版による。この版では作品は 410 行である。

(3) Dr. Franz Tyroller: *Die Fabel von dem Mann und dem Vogel in ihrer Verbreitung in der Weltliteratur* (Literarhistorische Forschungen heft 51. Berlin 1912)

(4) Aarne-Thompson: *Motif-Index of Folk Literature*: a *classification of narrative elements in folktales, ballads, myths, fables, mediaeval romances, exempla, fabliaux, jest-books, and local legends.* 6 vols. Bloomington. Indiana 1932-36.

(5) Alfons Hilka und Werner Söderhjelm (hrgg). *Die Disciplina Clericalis des Petrus Alfonsi* (Sammlung mittellateinischer Texte heft. l. Heidelberg 1911) Gaston Paris は P. W. V. Schmidt 校訂の Petri Alfonsi Disciplina Clericalis (Berlin 1827) に依っている。この版では此の exemplum は二十三番となる。

(6) *Petri Alfonsi Disciplina Clericalis* von A. Hilka und Werner Söderhjelm, französische Versbearbeitungen (Acta Societatis Scientiarum Fennicae XLIX/4)

(7) Jean Frappier *Remarques sur la Structure du Lai.* pp. 35.

(8) Manuscrits の descriptions は Omont による B. N. 837 の写真版, Romania T. VIII 中の Gaston Paris の lais inédits 又, Karl Warnke の *Die Lais der Marie de France*, Faral-Bastin : *Oeuvres Complètes de Rutebeuf* T. I pp. 11-23 等を参照されたい。

(9) Joseph Bédier: *La Tradition Manuscrite du Lai de l'Ombre* (Romania T. LV) Charles A. Knudson: The *Publication of Old French Texts, some comments and suggestions* Speculum vol. 24, 1949 は Bédier の考え方をよく要約している。

(10) Mac Crackea (éd.) *The Minor Poems of John Lydgate.* Part II. EETS O. S. 192, p. 469, p. 477.

(11) Natalis de Wailly (éd) *Récits d'un ménestrel de Reims au XIIIe siècle*, cités par Gaston Paris. Tyroller も G. Parisから再引用している。

(12) Osterley (éd) *Gesta Romanorum* cité par Tyroller

(13) Risterhuber: *Les contes et facéties d'Arlotto de Florence* (1873) 伊文は *Tyroller* の第二巻による。

(14) E. Hoepffner: Marie de France: *Les Lais* (Bibl. Romanica Strasbourg 1921) 尚 Barlaam

et Jasaphat については，Gaston Paris : Poëmes et Légendes du Moyen Age, Jean Sonet : Le Roman de Barlaam et Josaphat. 2 vols 1949-1950. Emmanuel Cosquin : Contes Populaires de Lorraine 2 vols. 1887 St. John Damascene : Barlaam and Ioasaph (Loeb classical library, 1914) 等を参照した。Tyroller の論文の二冊目は，73 の文学的伝承のテクストを集めて付録としてある。Tyroller によれば Jacques de Vitry の Exempla のこの話を含むテクストが挙げてあるが，Joseph Greven の Die Exempla des Jabob von Vitry Heidelberg 1914. には見当らぬ。